

聖徳太子 磯長墓復旧工事予定区域事前調査 - 附 立会調査 -

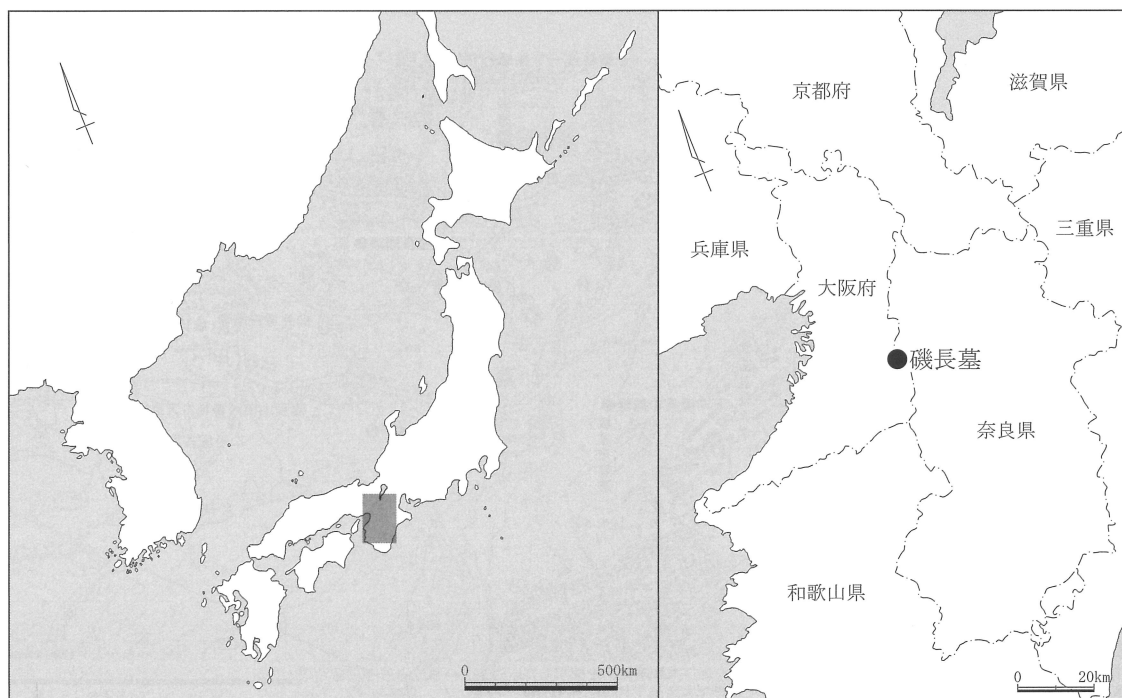
はじめに

聖徳太子磯長墓（以下、「当墓」）は、大阪府南河内郡太子町に所在する（第1図）。当墓の周知の埋蔵文化財包蔵地名は、叡福寺北古墳である。本報告は、前方に傾いた下段結界石据え直し工事に伴う①磯長墓結界石据え直し工事立会調査、その立会調査後に発生した下段結界石裏の石積崩壊に伴う、遺構の保護を前提とした適切な工法の検討に資することを目的として実施した②磯長墓復旧工事予定区域事前調査、事前調査の結果と陵墓管理委員会議での助言を受けて策定した工法に基づく③磯長墓石積復旧工事に伴う立会調査、以上3件にかんするものである。①の立会調査は、令和3年1月18日から1月22日まで実施し、25日に古市陵墓監区事務所磯長部職員が出勤した際に石積が崩壊していることを確認した。②の事前調査は、令和4年1月23日から2月4日まで実施し、学協会への現地公開は令和4年2月3日におこなった。③の立会調査は、令和5年6月5日から6月9日まで実施し、学協会への現地公開は令和5年6月7日におこなった。本報告は、横田真吾が執筆した。

（1）周辺の遺跡

当墓は、敏達天皇河内磯長中尾陵、用明天皇河内磯長原陵、推古天皇磯長山田陵、孝徳天皇大阪磯長陵を含む磯長谷古墳群の中にある（第2図）。この古墳群には、双方墳の二子塚古墳のほか、モンド塚古墳、釜戸塚古墳、石塚古墳、葉室塚古墳からなる葉室古墳群なども含まれる。敏達天皇河内磯長中尾陵が、前方後円墳である以外、他は円墳、方墳といった形状である。

磯長谷古墳群で採用された埋葬施設の多くは、横穴式石室であるが、仏陀寺古墳、松井塚古墳（墳丘は消失）、春日古墳（詳細は不明）のように横口式石槨を埋葬施設とする古墳も存在している。そのうち、松井塚古墳からは、飛鳥時代後半の土師器が石槨内より多数出土しており、他の横口式石槨墳の年代もおおよそ飛鳥時代後半と考えられる。



第1図 磯長墓 概略位置図(1/25,000,000、1/2,000,000)

当墓では、主として過去に中・下段結界石に関係する立会調査、事前調査、墳丘調査を実施している。

つぎに、平成 11 年度から 13 年度（2000 年 2 月から 2002 年 3 月）にかけては、事前調査の結果を受けて、現地で中段結界石抜き取り時の立会調査を実施し、平成 15 年度（2003 年 5 月から 2004 年 1 月）は施工業者の関連工場で立会調査を実施したが、基本的には事前調査で得られた所見と異なることはなかった⁽¹⁾。

(3) 基本的な層序

1層 表土。現地表面の土である。色調は黒褐色で、土粒子は細砂である。

Ⅲ層 遺物包含層。当墓築造前から存在し、地山とともに当墓の基盤となっている土層である。色調は黄褐色から灰黄褐色で、土粒子は細砂である。サヌカイト片と炭片を含む。

V層 現代造成土。現代の造成土である。色調は灰褐色から黒褐色で、土粒子はシルトから細砂である。

作図にあたっては、国土地理院発行の1/25000地形図「古市」と「大和高田」を使用した。

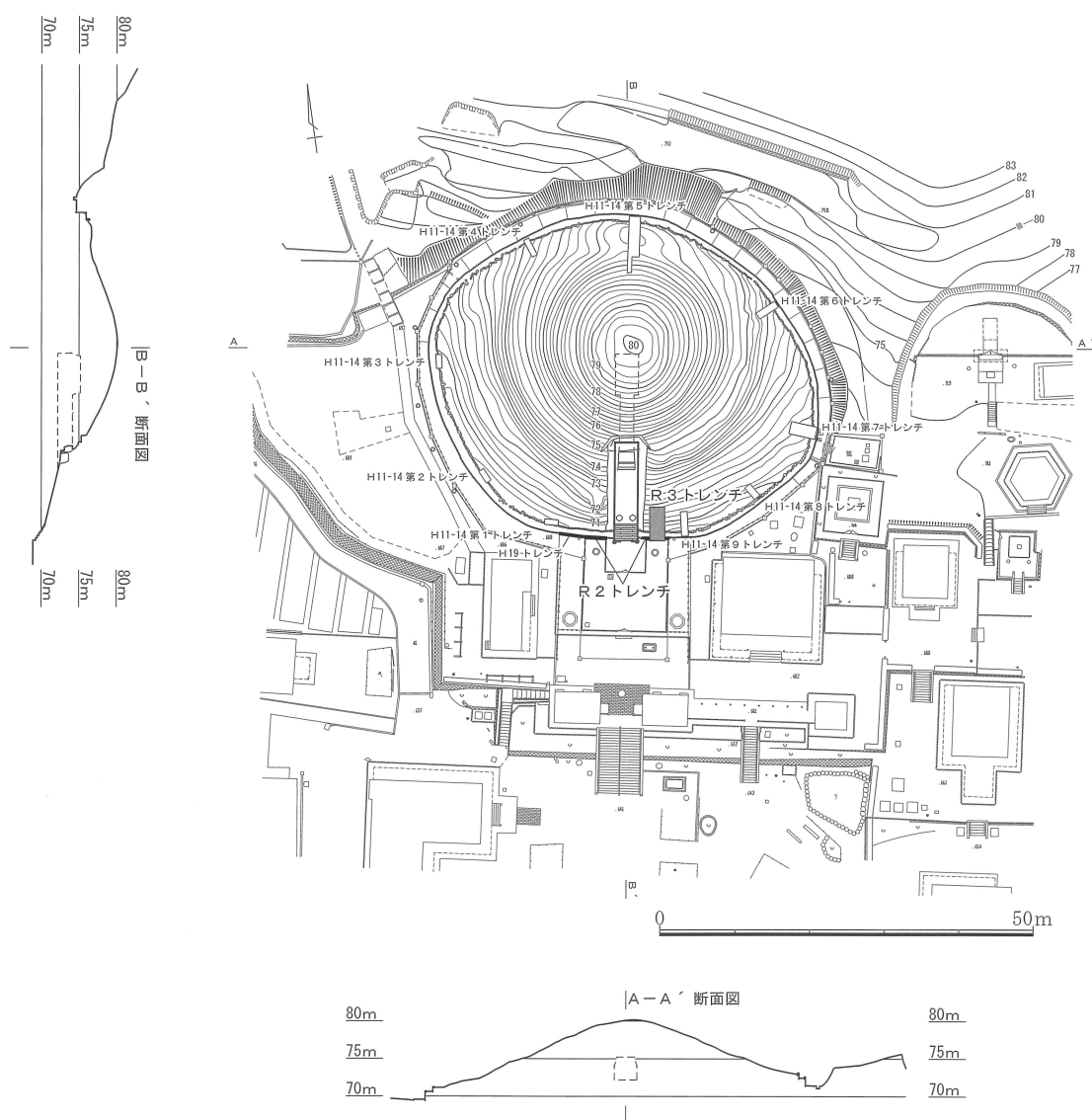
第2図 磯長墓 位置図(1/25,000)

1. 磯長墓結界石据え直し工事立会調査

(1) 調査の状況

土層 立会調査地点における土層は、西区と東区で共通である。近世盛土（Ⅱ）、地山（Ⅳ）、現代造成土（Ⅴ）、遺構埋土（Ⅵ）を確認した（第4図）。

西区 西区は幅3.1m、長さ0.5mで、下段結界石を外し、据え直すための溝を布掘りしたところ、下段結界石裏に石積を確認した。石積は、本来垂直だったと考えられるが、土圧のためか3度南寄りに傾斜していた。石積は、近世盛土で地山上に整地した上に築かれている。地山には、柱穴と考えられる遺構が断面と平面に認められ、近世以前に当墓を囲堯していた柵のような施設の痕跡と考えられる。柱穴は、掘形幅0.43m、柱痕幅0.15mで、深度は掘り下げていないため不明である。遺物としては、土師器、瓦が出土した。



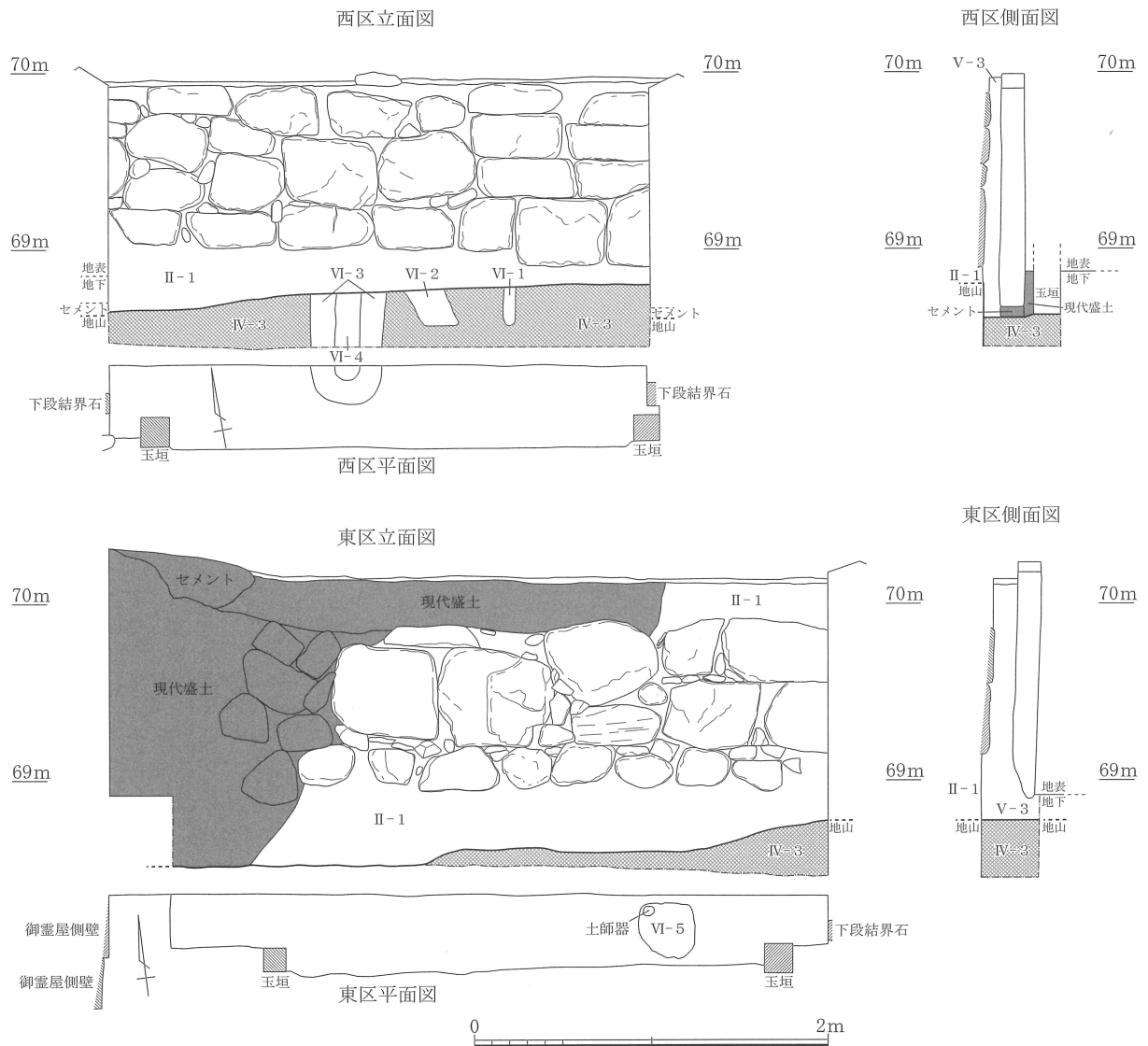
※1 作図にあたっては、『書陵部紀要』第57号第1図（北條・福尾2006）、同第60号第2図（福尾・清喜・加藤2009）と石積復旧工事図面よりトレースし、トレンチなどを加筆した。

※2 トレンチの色は、立会調査を黒色、令和3年度事前調査を灰色、平成11年度から同14年度事前調査を白抜きとした。

※3 高さの基準は、東京湾平均海面（T.P.）である。

※4 地図中で方位記号の指し示す方角は磁北である。

第3図 磯長墓 トレンチ配置図(1/1,000)



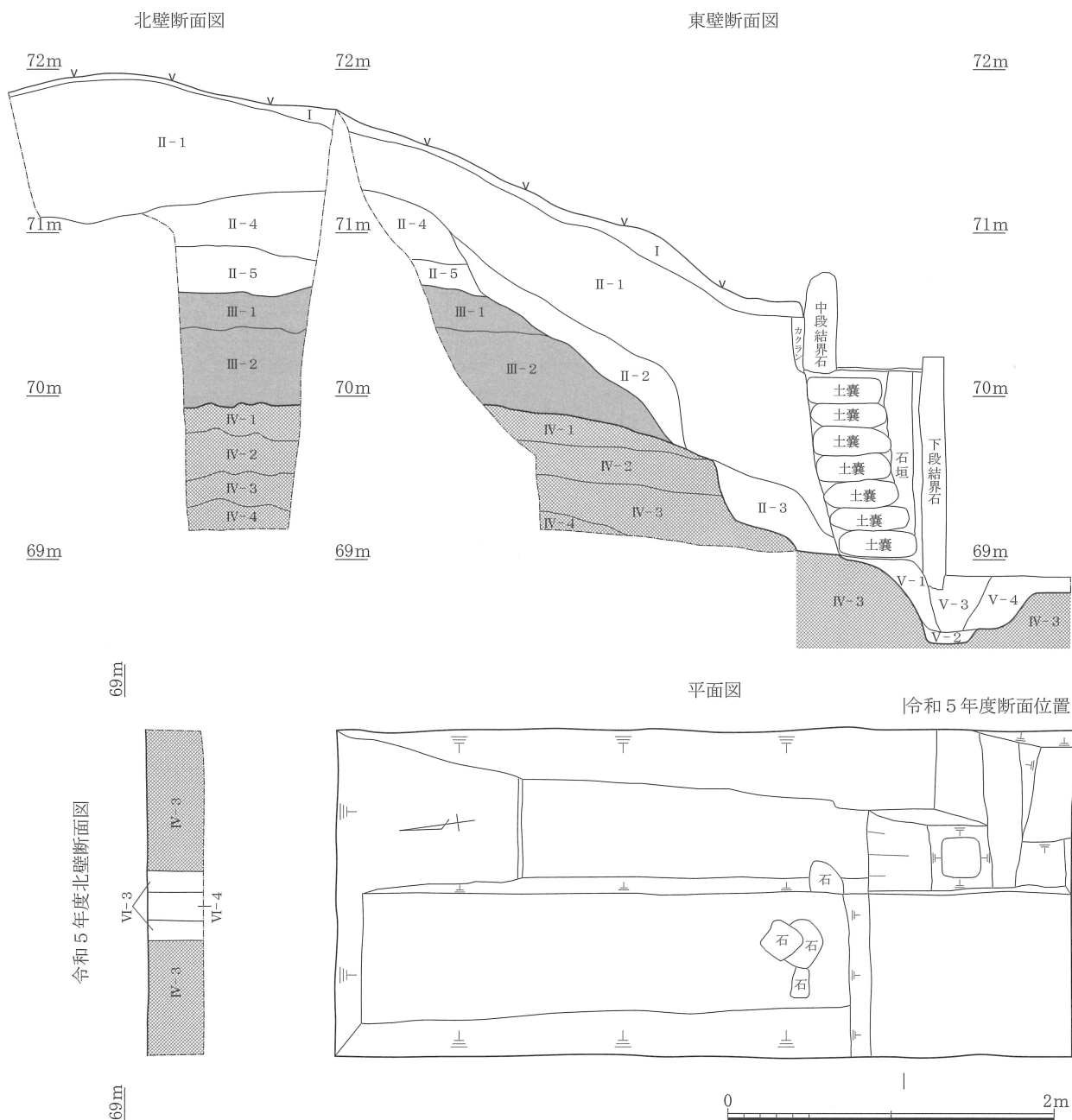
- | | | | |
|--------------|---------------------|-------------|---------------------|
| I. 表土 | 細砂 黒褐色 | VI-1. 遺構埋土か | シルト 褐色 |
| II-1. 近世盛土 | 細砂 暗灰褐色 | VI-2. 遺構埋土 | 細砂 黄褐色 |
| II-2. 近世盛土 | 細砂 暗黄褐色 | VI-3. 遺構埋土 | 細砂 暗黄褐色 (地山ブロック混じる) |
| II-3. 近世盛土 | 細砂 暗灰黄色 | VI-4. 遺構埋土 | 細砂 黒褐色 |
| II-4. 近世盛土 | 細砂 黄褐色 | VI-5. 遺構埋土 | 細砂 灰黄褐色 (土師器片含む) |
| II-5. 近世盛土 | 細砂 褐色 (炭混じる) | | |
| III-1. 遺物包含層 | 細砂 灰黄褐色 (炭混じる) | | |
| III-2. 遺物包含層 | 細砂 黄褐色 (サヌカイト混じる) | | |
| IV-1. 地山 | 極細砂 暗黄褐色 (鉄分混じる) | | |
| IV-2. 地山 | 極細砂 赤褐色 (白色礫と粗砂混じる) | | |
| IV-3. 地山 | シルト～極細砂 暗褐色 (大阪層群) | | |
| IV-4. 地山 | シルト～粗砂 灰褐色 (大阪層群) | | |
| V-1. 現代造成土 | 細砂 黒褐色 (令和3年度) | | |
| V-2. 現代造成土 | シルト～細砂 灰褐色 (令和3年度) | | |
| V-3. 現代造成土 | 細砂 黒褐色 (下段結界石据え直し時) | | |
| V-4. 現代造成土 | 細砂 暗灰黄色 (玉垣造成時) | | |
- ※ レベルの数値は、平成18年測量の界3号(68.750m)を基準にした。

第4図 磯長墓 令和2年度立会調査 平面図・立面図・側面図(1/40)

東区 東区は幅3.6m、長さ0.4mで、下段結界石を外し、据え直するための溝を布掘りしたところ、下段結界石裏に石積を確認した。石積は、本来垂直だったと考えられるが、土圧のためか3度南寄りに傾斜していた。石積は、近世盛土で地山上に整地した上に築かれている。地山には、柱穴のような不定形の遺構が平面に認められるが、掘り下げを実施していたため、詳細は不明である。遺構は、幅0.32m、長さ0.31mである。遺物としては、土師器、陶器、瓦片が出土した。

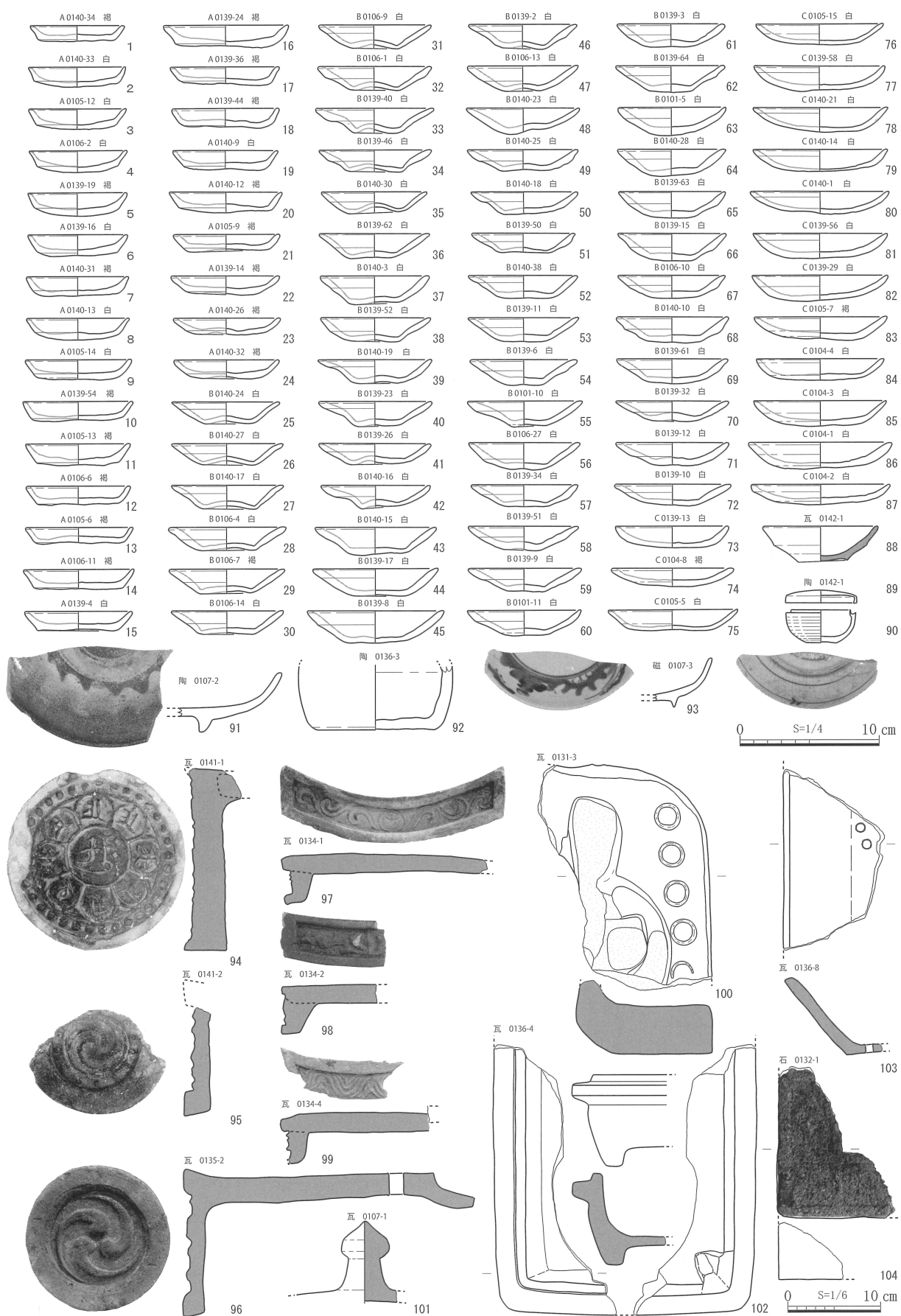
(2) 小結

西区と東区で得られた所見は、平成19年度に実施した下段結界石据え直し工事に伴う立会調査とほぼ同様である。いずれの場所でも、地山上に盛土後、石積を築き、その前に下段結界石を設置している。ただし、東区は地山の上に厚く盛土をし、脆弱な地盤であったためか、立会調査後に石積が崩落した。



※ レベルの数値は、平成18年測量の界3号(68.750m)を基準にした。

第5図 磯長墓 令和3年度事前調査・令和5年度立会調査 平面図・断面図(1/40)



第6図 磯長墓 出土品実測図(1) (1/6、1/4)

2. 磯長墓復旧工事予定区域事前調査

(1) 調査の状況

土層 土層は、表土（Ⅰ）、近世盛土（Ⅱ）、遺物包含層（Ⅲ）、地山（Ⅳ）、現代造成土（Ⅴ）を確認した。

遺構 事前調査では、見かけの当墓墳丘裾付近にトレンチを設定し、幅2m、長さ4.5mを掘削した。遺構としては、墳丘第1段目斜面を確認したが、貼石などの外表施設はみられなかった。当墓は、地山と遺物包含層の上に、場所によって1m以上も近世盛土が積まれ、下段と中段の結界石が据えられて、現在の景観になったことが、東壁の土層断面により明瞭となった（第5図）。

当墓の墳丘第1段目は、地山を基盤とすることを過去の事前調査でも知られていたが、今回の事前調査での断ち割りにより、サヌカイト片を含む遺物包含層も基盤としていたことが明らかとなった。現状の地山と遺物包含層の傾斜角度から見た場合、当墓本来の墳丘第1段目裾は、下段結界石周辺の可能性はある。

現在の南側中段結界石は、平成11から14年度の保存修復事業に伴う事前調査の時点で、当初の位置から動かされたものであることが明らかとなっていたが、中段結界石下の状況については不明であった。先述の断ち割りにより、地山と遺物包含層の上に、近世盛土が厚く盛り上げられ、その過程で中段結界石が据え直された状況が、土層断面で明らかとなった。中段結界石の下部には、中段結界石と同じ二上山凝灰岩が、根固めのために使われており、破損した中段結界石を再利用したものの可能性もある。

近世盛土中には、中世から近世にかけての土師器皿が混在しており、下層の方が古い様相を示すわけではなく、あくまで下段結界石を構築した一時期における、構築順序の単位を表しているのみである。それゆえ、トレンチ範囲には、中世に限定される時期の盛土や遺物包含層が存在していないことも明らかとなった。

遺物 遺物としては、土師器、瓦・瓦器、陶器、磁器、石造物、金属製品（銭貨等）が出土した。また、包含層よりサヌカイト片も出土した。出土点数は13679点である。出土層は、表土（注記0101～0110）と下段結界石設置時の近世盛土（注記0111～0143）である。土師器の図化では、左右形状の異なるものが多いことから、欠損がない完形に近いものを選び、断面を右側だけでなく左側にもグレーで表示した（第6図）。

土師器（第6図1～87）は、全て皿である。その製作技法、形状からA、B、Cに分けられる。A（1～24）は、体部にヨコナデを施し、底部形状はほぼ平坦である。B（25～72）は、体部上方にヨコナデを施すものが多く、底部形状は中央が盛り上がる。C（73～87）は、口縁端部にヨコナデを施すものもあるが、ほぼ外面調整をせず、平坦な底部から口縁部にかけてゆるやかに立ち上がる。Aは褐色系を主とする土器群で、B・Cは白色系を主とする土器群である。全個体に灯明の痕跡が残り、Aには1回のみ使用痕が残るものが多く、B・Cは複数回の使用痕が残るものが多い。Aの年代は12世紀後葉から14世紀前葉頃、Bの年代は14世紀前葉から16世紀後葉頃、Cの年代は17世紀前葉から18世紀前葉頃と推定する⁽³⁾。

瓦器（第6図88、101～103、第7図105）には椀があり、瓦質の火鉢と塼もここに含めておく。椀（88）は外面体部に稜をもち、内外面にミガキの単位は見えない。底部には、わずかに高台が残る。瓦器椀の終焉時期に近い14世紀頃のものの可能性がある。蓋（101）は宝珠形の頂部をもち、蓋の可能性が考えられるが詳細は不明である。火鉢（102、103）は、直線的な体部より、それぞれ角火鉢と考えられる。塼（105）は、「大瓦宗」の刻印を側面にもち、表面に刻線を交差させ、滑り止めとしている。

陶器（第6図89～92）には、合子と皿、火消具がある。合子（89、90）は淡緑色の釉が外面にかかり、内側に灰が残っていたため、火葬灰を入れたものの可能性がある。皿（91）は、茶褐色の釉の上に白色釉をかけている。見込は蛇の目で、円形の無釉部分が残る。火消具（92）は、無釉の焼き締め陶器である。

磁器（第6図93）は、肥前産の皿である。内外面に染付と釉を施す。

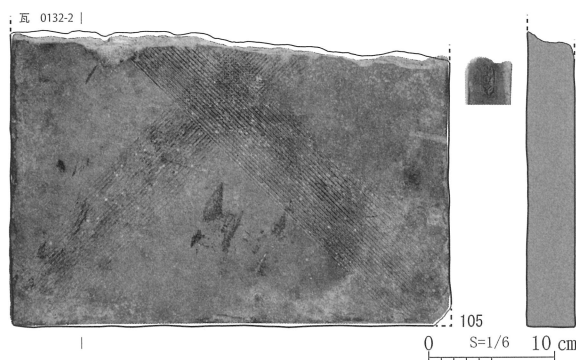
瓦（第6図94～100）は、軒丸瓦、軒平瓦、棧瓦、鬼瓦、鳥衾瓦、菊丸瓦、平瓦、丸瓦が出土した。軒丸瓦には、梵字瓦（94）と巴文瓦（95、96）があり、梵字瓦は当麻寺出土品と同文で、12世紀後葉頃のものである。軒平瓦（97、98）は唐草文、棧瓦（99）は波状文がみられる。鬼瓦（100）は外周円文が窪んでいる。

石造物（第6図104）は、寺山青石（石英安山岩）製で、表面に帯による区画と割菱紋がみられる。

金属製品（図版35-2）は、鉄釘片のほか、銭貨21枚、元符通宝、洪武通宝、寛永通宝が出土した。

(2) 小結

事前調査で得られた重要な所見は、平成 11 から 14 年度の事前調査での所見を補足して中段結界石の設置状況が明らかとなったこと、当墓墳丘について調査地点に外表施設が残っていないことが明らかとなった点である。調査では、墳丘第 1 段目裾付近に、葺石ないし貼石の転落石らしき大型の硬質石材は確認できなかったが、中段結界石の根石として二上山凝灰岩片があり、令和 5 年度の埴生岡上墓整備工事予定区域事前調査で、墳丘第 1 段目から二上山凝灰岩が使われたことが判明したことから、可能性の一つとして、当墓でも二上山凝灰岩が外表施設に使われたとも考えられよう。遺物としては、既往の調査で出土したものと同様、中世から近世にかけての土師器皿がもっとも多く、全て燈明皿であることから、12 世紀後葉から盛行する万灯会のような行事で使用された可能性がある。



第 7 図 磯長墓 出土品実測図(2) (1/6)

3. 磯長墓石積復旧工事に伴う立会調査

(1) 調査の状況

土層 立会調査地点における土層は、地山(Ⅳ)、遺構埋土(Ⅵ)を確認した。(第 5 図)

遺構 調査地点は、前々年度の事前調査トレンチの範囲のうち、復旧石積下部の基礎となる版築を実施するにあたり、地山を溝状に幅 2 m、長さ 0.6 m 掘削した部分である。調査の結果、葺石や貼石といった当墓築造当時の遺構は確認できなかったが、地山には、柱穴と考えられる遺構が断面に認められた。ただし、掘り下げを実施していないため、深度などの詳細は不明である。遺構は、掘形幅 0.42 m、柱痕幅 0.16 m、深さ 0.33 m 以上で、令和 2 年度立会調査の西区で検出されたものと規模、構造が類似する。西区のものと同様、近世以前に当墓を囲繞していた柵のような施設の痕跡と考えられる。

遺物 遺物は出土しなかった。

(2) 小結

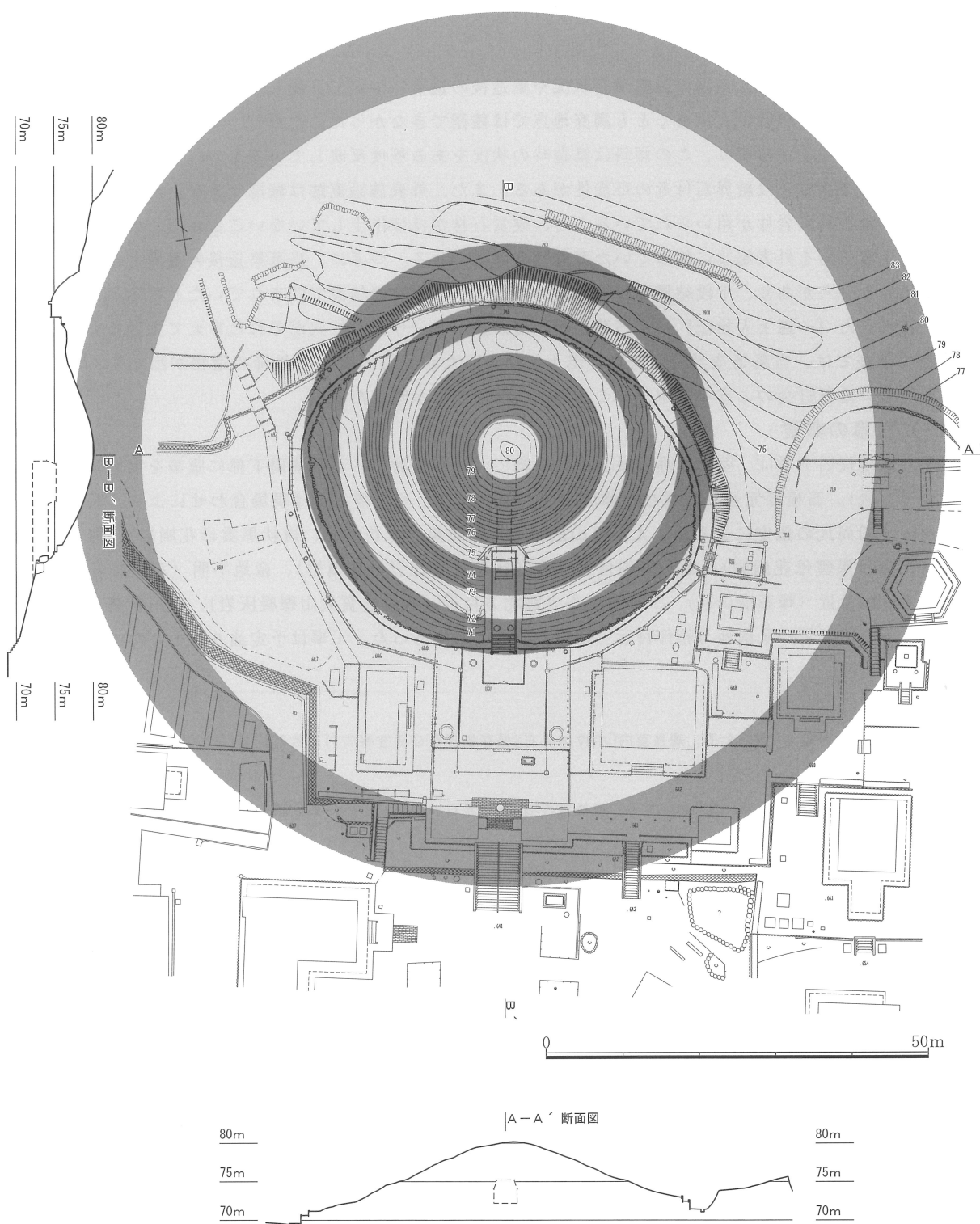
本調査では、版築実施予定箇所の地山を溝状に布掘りしたところで、断面に柱穴を確認した。柱穴は、西区で検出したものと同様の規模と構造であり、当墓の周囲に柵のような施設があったことがわかる。今後、当墓周囲で掘削を実施する際には、同様の遺構に注意が必要である。

4. 考察

事前調査では、当墓墳丘南端の位置をおおよそ知ることができた。その成果と過去の墳丘外形調査で得られた知見を元に墳丘復元図を作成した(第 8 図)。その結果、実際には墳丘第 1 段目裾は全周しないものの、規模は直径約 53 m と考えられる。また、墳丘周囲の地形をみると、南側の階段より下がった位置を基準に、墳丘中心から円を描くと直径約 114 m となる。墳丘背後の地形改変状況などから考えて、この直径約 114 m の範囲が、当墓築造時の主な地形改変範囲だった可能性がある。

また、来目皇子の埴生岡上墓にも同様の目を向けてみると、こちらにも実際には墳丘第 1 段目裾は全周しないものの、規模は一辺約 53 m であり、墳丘周囲の地形改変状況などから考えて、墳丘中心から約 114 m 四方が地形改変範囲だった可能性がある⁽⁴⁾。

このように見てみると、双方の墓は墳形や築造時期こそ違うものの、ともにほぼ同じ墳丘規模で、ほぼ同じ範囲を地形改変していることに気がつく。このことは、ともに皇子墓のため同格として、同様の規模で造られた可能性を示唆する。ただし、墳丘周囲の施設として、埴生岡上墓が外堤を有するのに対し、当墓は基壇状の平坦面へと変化する。このことは、畿内中枢部の大型墳の変遷過程とも整合的である。



- ※1 作図にあたっては、『書陵部紀要』第57号第1図（北條・福尾 2006）、同第60号第2図（福尾・清喜・加藤 2009）と石積復旧工事図面よりトレースし、一部加筆した。
- ※2 高さの基準は、東京湾平均海面（T.P.）である。
- ※3 地図中で方位記号の指し示す方角は磁北である。

第8図 磯長墓 墳丘復元図(1/800)

まとめ

(1) 調査の成果

遺構 3件の調査では、当墓の遺構残存状況や築造後の遺構について、新しい知見を得た。まず、当墓築造時に存在した外表施設は、少なくとも調査地点では確認できなかった。ただし、墳丘測量図と地山と遺物包含層の傾斜角度をみる限り、この傾斜は築造時の状況にある程度反映しているものとも考えられ、その場合、本来の墳丘裾は下段結界石付近の可能性もある。また、外表施設痕跡は確認できないが、中段結界石の根固めに二上山凝灰岩片が用いられていること、硬質石材がほぼ出土していないことから、埴生岡上墓と同様に二上山凝灰岩を外表施設に使っていた可能性も考えられる。つぎに、当墓築造後の遺構として、立会調査で検出した柱穴があり、下段結界石設置以前、当墓周囲は柵状の施設で囲まれていたと考えられる。鎌倉時代に描かれた『一遍上人絵伝』にも当墓周囲に柵が描かれ、今回の柱穴がそれと考えると大過ないだろう。

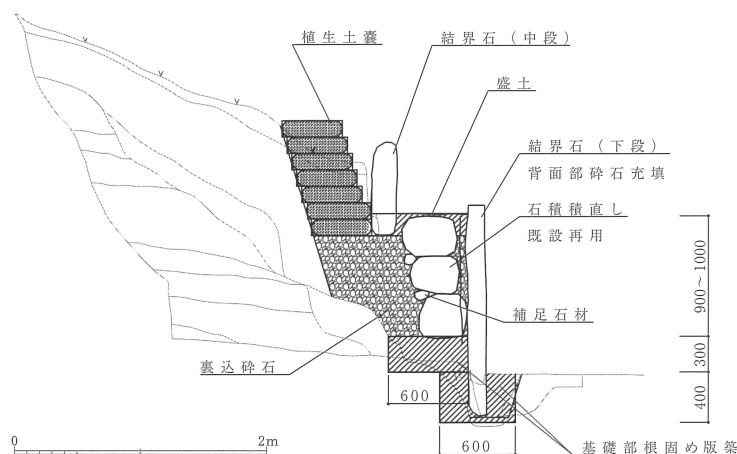
遺物 調査では、当墓築造当時の遺物は出土しなかったが、12世紀後葉以降の遺物が出土し、大量の土師器皿を用いる万灯会のような行事がおこなわれた可能性を示唆した。

(2) 工事の概要

当墓の石積復旧工事は、陵墓管理委員会議等を経て工法を検討し、石積基礎下部に版築を実施することとした(第9図)。石積は元通りに積むと強度が確保できないため、積み方は現場合わせによる。石積の石材産地は、奥田尚氏の鑑定によると、太子町山田付近(粗粒黒雲母花崗岩、斑状黒雲母花崗岩)、河南町持尾付近(片麻状黒雲母花崗岩)、太子町畑付近(片麻状斑状閃緑岩、斑礫岩)、産地不明(石英斑岩、玢岩)、太子町春日山付近(輝石安山岩)、太子町鹿谷寺跡北方付近(流紋岩質火山礫凝灰岩)、香川県豊島付近(安山岩質火山礫凝灰岩)、泉南地方箱作付近(砂岩)とのことであった。工事は予定通り施工した。(横田真吾)

註

- (1) 福尾正彦・北條朝彦「聖徳太子 磯長墓内「中段結界石」保存処理及び調査報告」『書陵部紀要』第57号、宮内庁書陵部、2006年。
- (2) 福尾正彦・清喜裕二・加藤一郎「聖徳太子 磯長墓の墳丘・結界石および御霊屋内調査報告」『書陵部紀要』第60号、宮内庁書陵部、2009年。
- (3) 土師器皿の年代推定にあたっては、下記文献を参考にした。
平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要』第12号、京都市埋蔵文化財研究所、2019年。
- (4) 横田真吾「来目皇子 埴生岡上墓整備工事予定区域事前調査」『書陵部紀要』〔陵墓篇〕第76号、宮内庁書陵部、2025年。



第9図 磯長墓 復旧工法図(1/60)



1 拜所正面（南から）



2 調査地全景（南東から）



1 西区 全景（南から）



2 西区 柱穴（南から）



1 東区 全景（南から）



2 東区 底部（南から）



1 東区 石積崩落状況（南から）



2 東区 石積崩落状況（南東から）



1 事前調査区 全景（南から）



2 事前調査区 東壁（西から）



3 事前調査区 南端（西から）



4 事前調査区 北端（南西から）



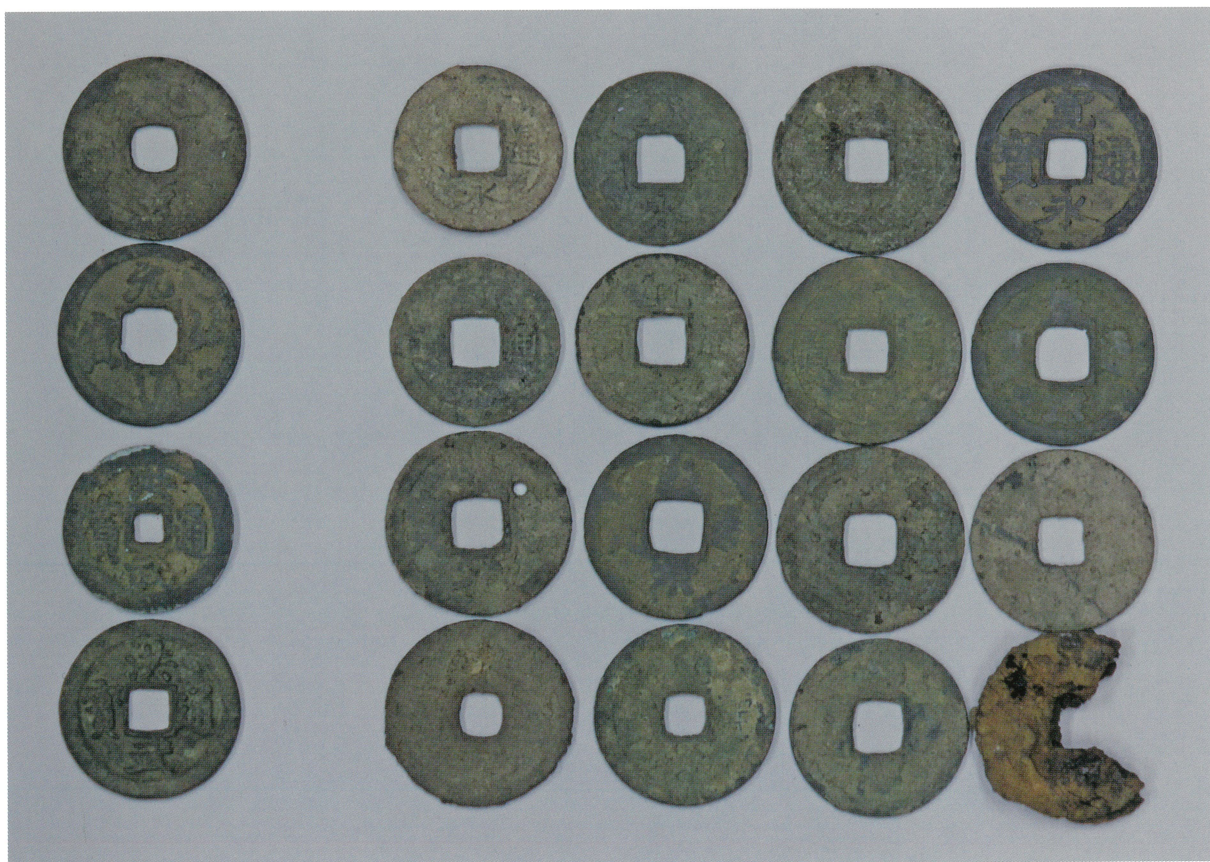
1 復旧工事立会箇所 地山掘削状況（南から）



2 復旧工事立会箇所 柱穴検出状況（南から）



1 土師器 灯明皿



2 金属製品 銭貨（等倍）